

生涯にわたって古典に親しむための授業開発

－自分流「春はあけぼの」の古文への書き換え活動を通して－

教育学研究科 教育実践創成専攻 教科領域実践開発コース 中等教科教育分野 有賀 元信

1. はじめに

1-1. 研究の目的

令和6年度は、平成30年告示の学習指導要領に基づく教育課程が導入されて3年が経つ年である。すなわち、高等学校における新課程を修了した初めての卒業生誕生の年である。新たな時代の幕開けを感じさせる年だからこそ、古典教育にも新たな風を吹かせたいと意気込み、研究を続けている。

研究の目的を以下のように設定して授業実践や文献調査などを進めてきた。「自分流「春はあけぼの」の古文への書き換え活動を通して、古文の表現や書かれ方に注目しながら古典に親しめるような授業を開発する」。これが、本稿における研究の目的である。

1-2. 研究の背景

まずは、古典教育に関する話題から見ていく。昨年度から筆者は、「生涯にわたって古典に親しむ」ということをテーマに掲げ研究を進めてきた。それは、【国語編】高等学校学習指導要領（平成30年告示）に提示された、「言葉のもつ価値への認識を深めるとともに、言語感覚を磨き、我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち、生涯にわたり国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う。」という目標を達成するためである。

国語科の学習指導要領の目標に「生涯にわたって古典に親しむ」とは明言されていない。ただ、国語科における6科目の目標にはそれぞれ「我が国の言語文化の担い手としての自覚」との文言がある。「我が国の言語文化」では古典を含めた幅広い対象が想定されている¹。また、殊に「古典探究」の目標を見ると、「生涯にわたって古典に親しみ」と示されている。そこで、本稿においては「生涯にわたって古典に親しむ」ことも国語科の目標であると読み替えている。

そもそも「生涯にわたって古典に親しむ」とは、どのような姿なのか。これは、昨年度からの継続研究である本稿においては、昨年度の定義を用いることにしたい。すなわち、

時間があったときに、少しでも古典に関するものに触れてみようかという気持ちを持ち続けること、これが本研究における「生涯にわたって」の意味であり、積極的に読み続けなければならないということは意味しない。「親しむ」ということだが、なにげないときに触れうるという程度の広い意味を指す。（有賀2024）

非常に消極的な定義である。しかし、後に確認するとおり、古典に対する高校生の眼差しは厳しいものであるため、古典の理解度などは考慮せず、あえてこの定義としている。

それでは、我が国の高校生たちは古典をどのように考えているのだろうか。高校3年生対象の国立教育政策研究所の調査では、以下の結果が得られている。生徒質問紙調査「古文は好きだ」という項目に対して、否定的な回答（どちらかといえば嫌い・嫌い）をしている生徒の割合は61.8%であり、また、「漢文は好きだ」という項目に対して、否定的な回答（どちらかといえば嫌い・嫌い）をしている生徒

¹ 学習指導要領（平成30年告示）には、「我が国の歴史の中で創造され、継承されてきた文化的に高い価値をもつ言語そのもの、つまり、文化としての言語、また、それらを実際の生活で使用することによって形成されてきた文化的な言語生活、さらには、古代から現代までの各時代にわたって、表現し、受容されてきた多様な言語芸術や芸能などを広く指している（【国語編】学習指導要領（平成30年度告示））」と説明されている。

の割合は 61.9%である（国立教育政策研究所 2015a）。この調査でも指摘されているように国立教育政策研究所の前回調査（2007年）よりも古典が嫌いだという生徒の割合は減っている²。古典に対する親しみは増していると考えられるが、それでも変わらず 60%を超えている。

このような状況では、「我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち、生涯にわたり国語を尊重」したり、「生涯にわたって古典に親し」んだりすることはまだまだ困難であるといわざるを得ない。それでは、古典嫌いを少しでも減らすにはどうしたらよいだろうか。いくつかの対応を見てみよう。

同研究所は、「今回の調査結果を踏まえた指導上の改善点」をまとめている（国立教育政策研究所 2015b）。筆者が簡略化した内容を示す。番号と下線は筆者が付けた。古典の内容理解だけでなく、①先人のものの見方、感じ方、考え方など、日本人の伝統的な価値観などを積極的に享受し、継承していくことで、それらを自らの生活に生かすことのできる能力を育成する指導が必要である。②講義中心の伝達型授業に偏ることなく、古典の場面を現代の社会や生活における自らの経験や見聞に照らし合わせて考え、話し合ったり書いたりするような言語活動を工夫することが求められる。また、③言葉の効果的な働きや文体の特徴などに着目する指導も必要である。

以上のような指導上の改善点が提示されている。①は、古典における日本的な価値観を生徒たちが自らの生活に生かすことを求めている。ここからは、現代でも古典に描かれた価値観が日常生活でも利用できるとする見方が読み取れる。言い換えれば、古典を実用的なものとして見ている。②は、指導上の工夫について述べている。講義型だけでなく、言語活動を取り入れることの重要性を説いている。③は、①とは別の観点から言葉そのものや文体など形式的な面に着目する指導を提案している。

ここで、創作活動を取り入れることで、古典嫌いからの脱却や古典の面白さの実感を目指した実践をいくつか挙げることにしたい。

中野貴文氏の実践においては、「古典の専門的知識や現代とは異なる価値観を学ぶ動機づけにできる、新しい古典授業」として「ドラマ教育（対象作品を各々鑑賞した学習者が、新たに脚本を創造して演じるもの）」が提案されている（中野 2015）。また、実践案ではあるが、『徒然草』236段「背を向ける狛犬」を扱った授業の構想もある。テクストの語句に着目しつつ、上人と神官のすれ違うやりとりを解釈する。その後、上人の失敗の後日談を生徒がグループで創作し、即興で演じるといった授業展開である（中野 2017）。松村美奈氏は、『伊勢物語』箇井箇を扱う授業で登場人物になりきって、作品を書き換える活動を行っている。その結果、生徒は本文の理解を深め、面白がって取り組んでいたという。一方で、文語体の文章を理解するという観点では、学習が浅くなってしまったと述べる（松村 2017）。これに加えて、田山地範幸氏は、「『伊勢物語』第6段「芥川」の文章に明示されていない「空白部分」を補って表現することを通して、読者である生徒が自らの世界を構築する」という目的のもと、翻作を取り入れている。活動内容は、「業平」と「高子」を登場させた翻作と「僕」あるいは「私」の視点からの翻作である（田山地 2024）。これらの実践で特に注目されるのは、生徒が古典への関心を高められるような「創作活動」を提案している点である。

書き換えや翻作³が「創作」⁴とはどういうことだろうか。一般的に創作といえば、ゼロから新しくイチを生み出すこと、なにかを創り出すことといった意味で捉えられているであろう。辞書⁵にも「新しいも

² 2007年に国立教育政策研究所によって行われた調査では、「古文が好きだ」という項目に対して、否定的な回答（どちらかといえば嫌い・嫌い）をしている生徒の割合は 72.7%であり、「漢文は好きだ」という項目に対して否定的な回答（どちらかといえば嫌い・嫌い）をしている生徒の割合は 71.2%である（国立教育政策研究所 2007）。

³ 首藤久義氏は、翻作とは、何らかの原作をもとにした表現のことである。原作をもとにした表現をオリジナルな創作と呼ぶことはできないため、「創作」の「創」を「翻訳」の「翻」に置きかえて、「翻作」と呼ぶ、と述べる（首藤 2023）。

⁴ 以降、一般的な意味の創作は「」を付けず、創作と表記し、本稿で採用する広い意味の創作は「」を付けて「創作」と表記する。

⁵ 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編『日本国語大辞典 第二版 第八巻』(2001)「創作」項。

のを最初につくりだすこと。ものを生みだすこと。また、そのもの。創造。」といった意味が載る。しかし、浜本純逸氏は、創作活動とは、感じる・おもう・考える・つくる行為であるとし、これを通して、新しい自分及び新しい人間関係の場を創り出していくと述べる（浜本・武藤 2018）。加えて、府川源一郎氏は、文章の創作の歴史は、それまでの作品の「書き換え」の歴史であると述べ、「純粋な創作」という行為自体も広い意味で言えば、過去の作品群の「書き換え」であるとして、創作の意味を甚だ広く解釈している（府川・高木 2004）。本稿も上に引用した2名の立場を採用し、広い意味で「創作」を考えることとし、「創作活動」とは「自力で表現する活動」とする。

本稿における「創作活動」の定義は、後述する本研究において行われた書き換え活動を「創作活動」として位置づけるためでもあるが、高木まさき氏が述べるように古代から現代にかけて蓄積されてきた文化の書き換えを自覚してこそ、創作が生まれると考えるためである（前掲 2004）。

以上見てきたように、高校生の古典嫌いを緩和し、古典に対して興味・関心を抱き、親しんでもらおうと数多くの創作活動の実践や提案がなされてきた。また、「創作」を幅広く捉え直すことによって、様々な「創作活動」の可能性が拓かれた。

上記の実践は、古典に親しみをもたせることや読解を深めることに一定の効果があった。しかし、国立教育政策研究所の指導上の改善点①は顕著であるが、これらの「創作活動」の実践も、本文内容に重点を置いている側面があり、ややもすると現代語訳で構わないと生徒に感じさせてしまいかねない。そこで、本研究では、自分流「春はあけぼの」を現代語版で書き、古文版に「書き換える」活動をすることによって、改善点③にもあるように古典の言葉そのものの働きや文体を生徒に意識させることを目指した。「書き換える」活動をすれば、1つの言語体系として古典を捉え直すことができる。そして、現代語訳には反映できない古典の語がもつ語感にまで考えが及ぶのではないかという見通しからである。

2. 実践報告

2-1. 概要

ここからは、具体的にどのような授業を行ったかを報告する。

- ・対象校 山梨県立高等学校
- ・期間 2024年10月 全4時間
- ・対象 1学年2クラス(67名)
- ・単元 自然へのまなざし
- ・教材 『枕草子』「春はあけぼの」(大修館書店『標準言語文化』)
- ・単元目標 「古文を読むために必要な重要語の意味を説明しよう。(知識・技能)」「自然の情景に対する作者の感覚を説明しよう。(思考・判断・表現[書くこと]ア,イ)」「古人の自然観に関心を抱き、積極的に説明しようとしている。また、創作活動や書き換えの活動を通して古文に親しみを持つ。(主体的に学習に取り組む態度)」

本单元では、小学校と中学校で学習をしている「春はあけぼの」を高等学校でも扱う。そこで、現代語訳にとどまらない読解が求められる。具体的には、文体に表れた作者の思いである。文法的に難解な表現はないため、重要語の知識や既習の文法事項を用いて自力で現代語訳したい。また、古人である清少納言の自然に対する感覚などを含めた本文の読解も狙いである。本文をある程度自力で読解することで、達成感を得られるとともに古典の読解もそれほど困難な作業ではないと実感できるはずである。

何度も触れてきた『枕草子』を改めて扱う際には、今までにはなかった理解や解釈が求められる。したがって、これまで蓄積してきた知見を獲得し、本作品に対する理解の枠組みを広げることは重要である。加えて、何度も扱っている教材だからこそ、親しみがあり、現代語と古語とあまり区別すること

なく関わることができる。内容はもちろん、そこから離れて、文体といった表現の形式にも目を向けさせたい。「創作活動」である自分流「春はあけぼの」を書いた生徒も多くいるはずである⁶。こうした義務教育段階でも扱う作品だからこそ、生徒が学んできた内容を生かすことができる。

本研究では、文章の形式面に注目させるによって、古典の言葉そのものに生徒が親しむことを目指した。「春はあけぼの」章段にもたくさん発見が眠っているということに気づくことが、高等学校卒業後も古典に関わるきっかけともなるだろう。

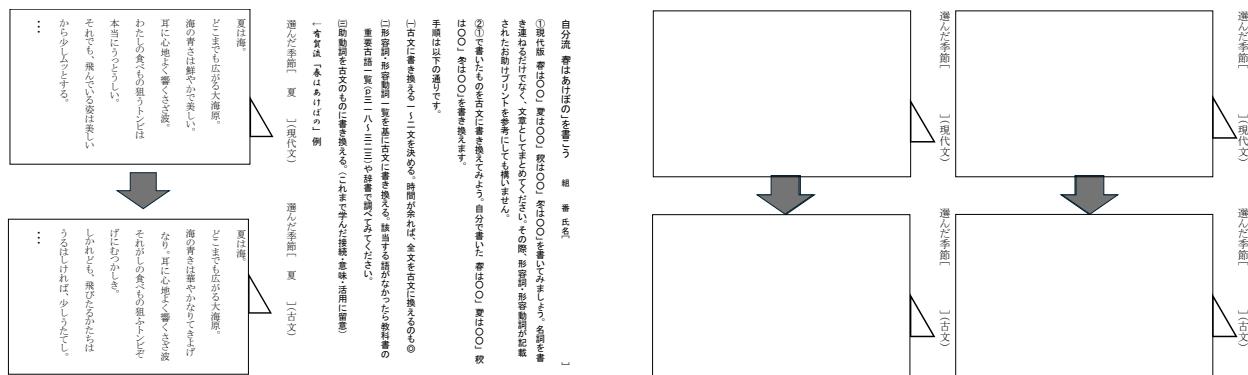
2-2. 全体計画

授業の全体計画は以下の通りである。

- 【第1時】 事前アンケート。「春はあけぼの」音読。今までで一番心惹かれた景色を記述。
- 【第2時】 「春はあけぼの」の現代語訳。文法（助動詞）の説明。
- 【第3時】 「春はあけぼの」の現代語訳。自分流現代語版「春はあけぼの」作成。
- 【第4時】 事後アンケート。文体の比較。自分流古文版「春はあけぼの」作成。

2-3. 授業の詳細

第1時と第2時は、主に『枕草子』「春はあけぼの」本文の内容理解に重点を置いた授業を行った。ここでは、本研究に直接かかわる第3時と第4時の授業について詳しく見ていく。図1・図2は、第3時から第4時にかけて使用したワークシートである。図1は、右側に活動の手順などを書き、左上に筆者の自分流現代語版「春はあけぼの」と左下に筆者の自分流古文版「春はあけぼの」を載せた。図2では、生徒が上の欄に現代語版「春はあけぼの」を書き、それを下の欄に古文で書き換えるようにした。



第3時では、「春はあけぼの」の現代語訳を済ませたあと、自分流「春はあけぼの」の作成に移った。

第4時では、「春はあけぼの」と自分流「春はあけぼの」や既習の「児のそら寝」「絵仏師良秀」とで文章の長さを比べた。その後、自分流現代語版「春はあけぼの」を自分流古文版「春はあけぼの」にグループで協力しながら書き換えた。最後に『枕草子』「春はあけぼの」をもう一度音読し、原文に描かれた内容や断定的で切れ味鋭い文末を改めて確かめた。そして、事後アンケートに答えてもらった。

この時間は「春はあけぼの」と自分流「春はあけぼの」や既習の教材とで文章の長さを比較する活動を行った。この活動のねらいは、清少納言の書きぶりと生徒が自分で作った「春はあけぼの」やすでに

⁶ 中学校の国語の教科書は教育出版、三省堂、東京書籍、光村図書の4社が文部科学省の検定済となっている。教育出版「自分の考えを伝え合おう」。三省堂「私の『枕草子』『徒然草』」。東京書籍「表現を工夫して隨筆を書こう」。光村図書「自分流『枕草子』を書こう」。なお、すべての会社で『枕草子』「春はあけぼの」を扱っている。以上は、すべて中学2年生用で令和2年版の教科書である。

学習した教材の書きぶりとの差異を強調することである。文学ジャンルによる文章の長さの違いはある。その一方で、他作品とは異なり、小気味よく四季の「をかし」を言い切っていく文体や本文を読めばすぐに書かれた場面が喚起される優れた表現力を生徒に意識させたいと考えた。

現代語版の「春はあけばの」を古文版の「春はあけばの」に書き換える際に生徒は、各自が持つ電子辞書やいくつかの書籍⁷を活用していた。また、古語の形容詞・形容動詞とその意味が書かれたプリントを筆者が作成し、それも適宜参考しながら、筆者をはじめとして参観していた教員に助言を求めていた。

書き換える際の条件として、少なくとも1~2文を書き換えること、形容詞・形容動詞・助動詞のみを書き換えればよく、動詞や名詞などは現代語のままで良いということを提示した。学習進度に合わせるためにあるとともに、動詞と名詞の書き換えに時間を取るよりも形容詞・形容動詞・助動詞など直近で学習した知識を活用することでその定着を図るためである。

生徒が書いた自分流「春はあけばの」を紹介する。古文に書き換えた箇所には、筆者が下線を引いた。

	現代語版「春はあけばの」	古文版「春はあけばの」
生徒①	秋は紅葉。 葉が鮮やかに染まって美しい。 虫の音が心地よい。 風の音は趣がある。 木々が赤や黄色に染まり、散っていくのが美しい。	秋は紅葉。 葉の色は <u>華やかなりてきよげなり</u> 。 虫の音は <u>なつかし</u> 。 風の音は <u>いとおかし</u> 。 木々が <u>紅</u> 、黄色に染まり、散り <u>過ぐのはあ</u> <u>はれなり</u> 。
生徒②	春は桜。 何十年何百年と生きている桜。 つらなっている姿が趣を感じさせる。 校庭で行われる別れと出会いは美しい。 また桜の花がちることによりさらにきわだたせる。	春は桜。 <small>いくじゅうねん いくひゃくねん</small> <u>何十年、何百年と生きたる桜。</u> <u>つらなりたるかたちはいとをかし</u> 。 校庭に <u>ある</u> 別れと出会いは <u>きよらなり</u> 。 また桜の花落つることより (筆者注: 最後は未完)
生徒③	冬は雪。 白くどこまでも広がる 雪はとてもきれい	冬は雪。 白くどこまでも広がる

生徒①②のように現代語版「春はあけばの」を古文版「春はあけばの」に書き換えられていたのは、全体の9割ほどで、生徒③のように古文への書き換えができなかった例は全体の1割ほどであった。生徒①は「をかし」と書くべきところを「おかし」と書いてしまっており、生徒②は、古文への書き換えが最後で途切れてしまっているが、兩人ともに文法的事項に気をつけて書けている。

3. アンケートの結果と考察

3-1. アンケートの結果

事前アンケートと事後アンケートの質問事項(両面)を載せる。図3が事前アンケートであり、図4が事後アンケートである。これらについて、紙幅の都合上、特に本研究に関わると思われる項目に絞って生徒の回答やその分析、考察を述べる。事前2, 3, 8と事後2, 3, 4, 5の7項目である。

⁷ 荻生公男『現代語から古語を引く辞典』(三省堂、2007)
古橋信孝ほか『現古辞典:いまのことばから古語を知る』(河出書房新社、2018)

2024年10月8日 6. 昔の古典の授業で意識して学ぼうとしていることはありますか?
山梨大学教職大学院実習生 有質

10月18日
山梨大学教職大学院実習生 有質
5. 高校卒業後も古典作品（古文・漢文）を読みたいと思いますか？理由も含めて記述してください。

研究授業に関するアンケート

1. あなたのクラス・出席番号・名前を記入してください。

2. 古典作品（古文・漢文）を読むことは好きですか？

好き・どちらかといえば好き・どちらかと言えば嫌い・嫌い

3. 古典（古文・漢文）は得意ですか？

得意・どちらかと言えば得意・どちらかと言えば不得意・不得意

4. 古典の授業に対して、どのようなイメージを持っていますか？

5. 原文を読まず、現代語訳だけで古典作品（古文・漢文）を読むことについて、どのように感じますか？

回答の内容は成績に反映されず、回答の内容は研究以外の目的に使用されることはありません。
アンケートは以上です。ご協力ありがとうございました。

図3：事前アンケート

研究授業に関するアンケート

1. あなたのクラス・出席番号・名前を記入してください。

2. 今回までの授業によって古典に対するイメージは変わりましたか？簡単で良いまんべんので、理由も含めて教えてください。

3. 授業で古典（古文・漢文）の考え方を基に随筆を書き、それを古語で書き換える活動をしましたが、こうした活動を今後もしてみたいですか？理由も含めて教えてください。

4. 「枕草子」で自然の景物や四季への感じ方や考え方を学びましたが、あなたは自然の植物や四季に対する考え方には変化がありましたか。

回答の内容は成績に反映されず、研究以外の目的に使用されることはありません。
アンケートは以上です、皆さんの意見を参考に、よりよい古典教育を目指してまいります。
ご協力、誠にありがとうございました。

図4：事後アンケート

事前アンケートでは63人の回答を得た。事前2「古典作品（古文・漢文）を読むことは好きですか？」と事前3「古典作品（古文・漢文）は得意ですか？」の結果から述べる。「好き」が3人、「どちらかといえれば好き」が11人、「どちらかといえれば嫌い」が35人、「嫌い」が13人であった。また、「得意」が1人、「どちらかといえれば得意」が5人、「どちらかといえれば不得意」が29人、「不得意」が27人であった。古典に好意的な生徒は約23%、否定的な生徒は約77%いる。また、「古典が得意・どちらかといえれば得意」な生徒は約10%、「古典がどちらかといえれば不得意・不得意」な生徒は約90%に上る。

事後アンケートの回答数は62人で事前アンケートから1人減っている。事後2「今回までの授業によって古典に対するイメージは変わりましたか？」の結果である。「変わった」は47人で「変わらなかつた」は15人であった。「変わった」の主な理由では「親しみやすくなった」「昔の人の考え方と共感できる」「読み解きやすい」という理由が挙がった。「変わらなかつた」理由は13人が「古典が難しい」といった内容であった。他2人は理由の記述がなかったため、詳細は不明である。

事後3「授業で古典（古文・漢文）の考え方を基に随筆を書き、それを古語で書き換える活動をしましたが、こうした活動を今後もしてみたいですか？」の結果である。「してみたい」は38人で「したくない」は14人であった。「してみたい」の主な理由は、「楽しい」「古文に書き換えられたときの達成感がある」「活用形や古語の学習ができる」などであった。一方、「したくない」の主な理由は、「古語への書き換えや活用形などの文法が難しい」であった。ただ、したくないと回答した14人のうち2人が「活用形や古語の学習を深めてからやりたい」と回答していた。

事後4『枕草子』で自然の景物や四季への感じ方や考え方を学びましたが、あなたは自然の景物や四季に対する考え方には変化がありましたか。」の結果である。「変化あり」は55人であった。「変化なし」は7人であった。変化した理由はさまざまだが、「自然の良さをより知ることができた」「目だけよりも五感で自然を感じた方が深みが出る」などの理由が挙がった。変化なしの理由については特にはつきとした記述はなかった。

事前8と事後5の結果である（「高校卒業後も古典作品（古文・漢文）を読みたいと思いますか？」）。「読みたい」は事前21人で事後34人であり、一方「読みたくない」は事前42人で事後28人であった。

事前8における詳細な結果は以下の通りであった。「読みたい」の主な理由は、「現代文学では得られない視点で読むことができる」「昔の人の考えていたことや気持ちを知るのは楽しいし、古典が結構好き」であった。「読みたくない」理由は、「将来古典を使う必要は無い」「古典作品をよむことは大切だと思うけど、古典が苦手なのでわざわざ読もうと思わない」であった。読みたいと回答した人は、古典特有の見方や感じ方に読む必要性を感じている。一方、読みたくない人の主な理由は、古典が苦手だから、実用性を感じていないからなどとまとめられる。また、苦手だから読みたくないと回答した生徒は、28

人であり、実用性を感じないから読みたくないと回答したのが9人であった。

事後5における詳細な結果は以下の通りであった。「読みたい」理由は、「この機会をきっかけに昔の人たちと関わることができる」「現代語とは違う表現がされて面白い」「今とは少し違う感性の古典を読むとリラックスできる」などであった。一方、「読みたくない」理由は、「古典に触れ合うことは大切だと思うが読みたくはない」「役立たないし使わない」などであった。一部の生徒は古典特有の表現に面白さを感じ、古典を読みたいと回答した。読みたくないと回答した28人の生徒のうち6人の生徒は、役に立たない、使わないなど実用性からの理由であった。また、16人の生徒は古典が苦手、読解が大変など原文に触れて理解する困難を訴えた。

本研究における「創作活動」の成果と課題を考察するために、特に研究に関わる意見が変わった生徒の回答を見ていく。まずは、古典を「読みたくない」から「読みたい」に変化した生徒である。意見が変わった生徒は17人いた。「とくに思わない。覚えることが多く、できないから」と答えた生徒は、「読みたい。考えを共有できたり、見方が広がったから」と改めて答えた。また、「読むことがあまり好きではない。古文を読むと疲れる」と答えた生徒は、「現代語とは違う表現がされて面白いので読みたい」と改めて答えた。すべての生徒の意見が変化した理由は見られないが、17人のうち元々古典に苦手意識を持っていたのは11人であり、古典の実用性の無さを述べていた生徒で変化したのは3人であった。

次に、古典を「読みたい」から「読みたくない」に変化した生徒である。意見が変わった生徒は2人いた。「たくさん古文・漢文を知りたい」と答えた生徒は「苦手だから読みたくない」と改めて答えた。「面白そうだったら読みたい」と答えた生徒も「苦手だから読みたくない」と改めて答えた。

3-2. アンケートの考察

事前アンケート8、事後アンケート5の結果から考察を述べる。古典を「読みたくない」から「読みたい」に変化した生徒から指摘できるのは、古典を実用性に結びつけて考えている生徒よりも古典を「苦手だ」と考えている生徒の方が、古典に対する意識は変わりやすいということである。一方で古典を「読みたい」から「読みたくない」に変化した生徒から指摘できるのは、事後アンケート3にも関わるが書き換え活動を通して、文法の難しさが強調されてしまった点である。例えば、「古語への書き換えや活用形などの文法が難しい」という回答は前に見た通りであり、活動をまたしたいと回答した生徒の中にも「難しいが楽しい」といった難しさを表明した回答が5人ほどから得られていた。

4. 本研究の成果と課題

これまで見てきたアンケートの記述や紙幅の都合で掲載できなかった記述から本研究の成果を示す。「春はあけぼの」の古文への書き換え活動によって、生徒の古典への親しみを深めることができた。その結果、「生涯にわたって古典に親し」みたいという生徒も増加した。一方、一部の生徒は「創作活動」によっても古典に親しみを深められなかつた。古典に親しめた生徒の回答例としては「自分で古文を書いてみると自分が昔の人になつたみたいで面白かった。古典に対するイメージが親しみやすいものに変わつた」「この前まではネガティブにとらえていた古典がこの授業で少し楽しくなつた。これからももし古典が出てくるような教材があれば積極的に取り組んでいきたい」などがある。これらの記述と本稿でこれまで見てきたアンケートの結果に鑑みても本「創作活動」は生徒の古典の親しみを高め、生涯にわたって古典に親しむことに寄与したと言えるだろう。

また、生涯にわたって古典に親しむ際の基盤となる楽しさや清新さを生徒に感じさせることができた。一方で「苦手だから読みたくない」に代表されるように「創作活動」後でも、文法が障壁となって古典に親しめていない生徒もいたことが判明した。文法学習に関しては、文語文法を習い始めて半年ほど

の生徒にとっては困難を極めた。おそらく用言や助動詞の活用形などを習得してから古文への書き換え活動を行えば、別の結果が得られたであろう。

ここからは、本研究の課題を示す。一点目は、「春はあけばの」特有の文体の特徴を生徒にうまく伝えられなかつた点である。アンケートの記述において文体や表現に着目して古典に親しもうとする回答は1人のみであり（「現代語とは違う表現がされて面白い」）、内容に関する記述が大半を占めた。これは、そもそも、文体という概念に馴染みがなく、満足に授業で扱うこともできなかつたためだと思われる。

二点目は、文法学習に関する課題である。当初は、1年生なので現代語版「春はあけばの」のうち形容詞・形容動詞・助動詞のみ古文に書き換えることを想定していた。だが、動詞や名詞なども含めたすべての語句を古文に書き換えるとする生徒がほとんどであった。文法の知識が不足し、そもそも品詞がわからない生徒も多かったため、活動の時期を見極める必要があった。文法に習熟していない生徒にとっては、文法の学習にもつながらなかつたのかかもしれない。

5. おわりに

日本の古典文学に対する風あたりは厳しい。それにもかかわらず、古典廃止論が現実味を帯びないのはそれだけ古典に人を引きつける力があり、歴史の中で人々が紡いできた物語や思いがあるからであろう。本研究は、現代語訳で終わらずに原文で古典に触れるにはどのような実践が必要か、と自問しながら考え出したものである。少しでも原文の良さを理解する生徒がいれば、それが一番の喜びである。

○参考・引用文献

- ・有賀元信「生涯にわたって古典に親しむための授業開発—『枕草子』類聚的章段における創作活動を手がかりとして—」『山梨大学教職大学院 令和5年度 教育実践研究報告書』 pp.158-166
- ・国立教育政策研究所 (2007) 「平成17年度高等学校教育課程実施状況調査」 国立教育政策研究所 教育課程研究センター
- ・国立教育政策研究所 (2015a) 「平成27年度高等学校学習指導要領実施状況調査 生徒質問紙調査（国語総合）」 国立教育政策研究所 教育課程研究センター
- ・国立教育制作研究所 (2015b) 「平成27年度学習指導要領実施状況調査 教科・科目等別分析と改善点（高等学校 国語科 国語総合）」 国立教育政策研究所 教育課程研究センター
- ・首藤久義 (2023) 『国語を楽しく——プロジェクト・翻作・同時異学習のすすめ』 東洋館出版社
- ・竹村信治「翁の物語としての『竹取物語』：“古典”に親しむ”ために <長谷川滋成先生退官記念特集>」『国語教育研究』第45号, 広島大学教育学部光葉会, pp.68-81
- ・田山地範幸 (2024) 「翻作を通して古典を楽しむ『伊勢物語』第六段「芥川」を読む」『国語探究』第4号, 北海道教育大学国語探究研究会 pp.83-88
- ・浜本純逸監修・武藤清吾編 (2018) 『中学校高等学校 文学創作の学習指導』 溪水社
- ・府川源一郎・高木まさき/長編の会編 (2004) 『認識力を育てる「書き換え」学習』 東洋館出版社
- ・中野貴文 (2015) 「研究と教育の架橋—専門性の行方—」 東京大学国語国文学会『国語と国文学』第92巻第11号, 明治書院 pp.25-35
- ・中野貴文 (2017) 「背を向ける狛犬とすれ違う対話」『ともに読む古典中世文学編』 笠間書院, pp.138-149
- ・松村美奈 (2017) 「古典作品を「自分の言葉で書き換える」言語活動」—国語総合（古典）『伊勢物語』—「筒井筒」・『寓話』「塞翁が馬」の授業実践より—』『愛知大学教職課程研究年報』第七号 pp.103-113
- ・文部科学省『【国語編】高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説』